



←地下壕内部の壁。土嚢にセメントが詰め込まれたもので構築されている。史実かは不明。



↑地下壕内部の部屋。



←戦闘の概要図だろうか？部屋に掲げられている。ベトナム語のみの手書きである。判らない。

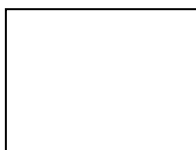


司令部の部屋→
説明文らしきものがあるが、
これまた、ベトナム語。判らない。



←これも司令部部屋。
説明文はフランス語
も添えられている。な
にやら配置された各
部隊の兵士数が書か
れているようだ

指令室→
この程度の広さ。



←動画

よく知られた記録映像である。ド・キャストリー司令部が陥落し、ベトナム旗が翻る瞬間の映像。この映像が勝利のシンボルとして使われる。さらに苦難の歴史がここから始まる。1975年まで。



←内部からトレンチラインに通じる。



←こういった佇まいの場所。大木の向こうは主要道路。その向こうはナムソン川。チョット冗談に記念写真。ベトミン軍兵士です。



↑ゲートをくぐって外に出ると、みやげ物店が。インドシナ戦争の写真集を購入。

テイエンビエンフー博物館

1984年に開設された小さな博物館。テイエンビエンフーにおけるベトミン軍の作戦、戦闘の様相や当時使われた兵器、通信機器、食糧の供給施設、兵士たちの生活、残されている文書、フランス軍降服の瞬間、和平会議、世界の潮流などを示す写真が脈絡もなく羅列的に展示されている。中庭には当時使用された重火器も展示されている。1984年以降、先に見たド・キャストリー司令部跡やこれから見ることになる勝利の記念像、A1の丘、解放軍戦士の墓地などの一連の記念碑的施設が整備されたものである。

少しページを割いて、展示物をお見せすることとします。説明文を少し翻訳しながら。説明文はベトナム語、フランス語、英語の3カ国語表記となっている。



↑博物館入口。例によってベトナム語のみの表記。



↑ホー大統領がハノイで独立宣言を読み上げている



各地方出身者の混成ゲリラが敵を掃討するため、地雷を設置している。下は、ベトナム兵がフランス軍に支援で与えられたアメリカのゴムボートから機械や兵器を採り出している。CANK 作戦の戦場で覆い隠されていたものである。1944. 12. 26. 17:12



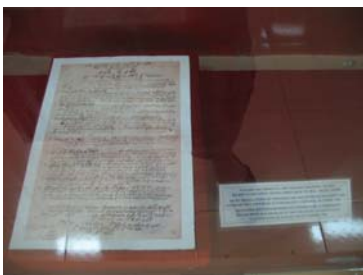
LAI GAN 県 TUAN GLAO 郡の PU NHUNG コミューン（ベトミン委員会）の MEO 族のゲリラチーム（女性である）と SUNG PHAI SINB 同志が写真に収まっている。西北地方における敵との戦闘で有名、讃えられた。



ロケット砲・1949



←第174連帯の党政治局員 TRAN HUY 同志が使った手帳。北西地域の兵士を指揮するよう任命を受けた時。テークノートしている。



←西北作戦において兵士や協力者の労務提供者に発せられた、ホー大統領の7項目の規則。その内容については説明なし。興味あるが、わからない。

LAI CHAN の町の解放を目指して、第316旅団が敵の24の歩兵中隊を殺戮する目的を追求中である。
1953年12月 →



←ラオスのレジスタンスの支援を受けたようなことが書かれている。



↑フランスの防衛大臣がデイエンビエンフーの占領作戦に出発する落下傘兵にメダルを授けている。



↑フランス植民地主義者は国民に強要して彼らの手先である軍隊の増強に努める。



↑フランスとバオダイ政権との軍事協議によって、彼らは戦線を拡大し、ベトナム戦争へ広く開戦するよう政権を支援することとなった。



↑デイエンビエンフーへ作戦を展開している正規歩兵第308、304、312、316旅団。↑武器を積んだ輸送部隊のトラックの車列。デイエンビエンフー前線へ物資を供給。



↑対空技術旅団が作戦を展開中



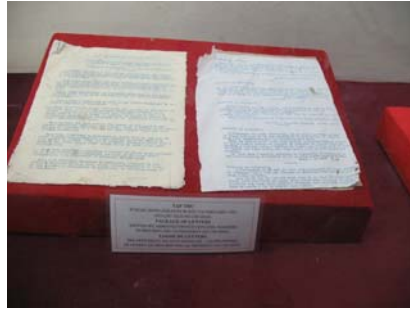
→DOC LAPHILL 要塞を攻撃する第115大隊、第116連隊、第312旅団の兵士。1954年3月14日の夜から15日の夜明けにかけてである。





←「独立の丘」要塞を攻撃する直前の第165連隊、312旅団の3兵士。

←右下。敵軍の指揮官である大佐 PIROTH。ベトナム軍を封じ込める約束が達せられず、3晩の後、手榴弾で自殺した。



↑手紙の束
 デイエンビエンフーで捕らわれたフランスのオフィサーや兵士がホー大統領に宛てた手紙。



←1954年5月7日。ド・キャストリーの降伏である。



←スファヌボン首相がデイエンビエンフーの戦いに勝利した兵士が送った電信文。

←中国の自由軍がデイエンビエンフーで勝利したベトナム兵士に書いた手紙。



←デイエンビエンフー作戦に呼応して、出身地域を超えて（民族を超えて）編成された5軍が、フランスの予備の複数の大隊を殺戮するため待ち伏せしていた。1954年1月19日。



↑デイエンビエンフー作戦に呼応してハノイでも武装し、ギアラム空港を攻撃。敵軍の補給路を断ち切った。



←アメリカと同盟国が南ベトナムから撤退することの
パリ合意の署名式。1973年11月27日



←最高位将軍ヴォー・グエン・ザップはダイエンビエンフーの戦闘を成し遂げた栄光の部隊に断固たる勝利、断固たる戦闘を讃え、旗を授けた。



ダイエンビエンフーの勝利に勇気付けられたキューバの人民は国家の独立を勝ち取るための闘いに立ちあがった。
1959年独立記念日の集会。



アルゼンチンの人民はダイエンビエンフーの勝利に鼓舞され独立を勝ち取る闘いに立ちあがった。1962年独立記念日の集会。



←アジア・アフリカ人民の連帯意思を表明するため、25カ国の代表団が参加したインドネシアのバンドンでの会議はダイエンビエンフーのベトナム人民の勝利に賛辞を送った。

左はゴムタイヤサンダル。徴用された女性 THANH HOA 県の HATHI MIEN が履いていたもの。彼女はダイエンビエンフー作戦に尽くした。弾薬の運搬中に道路上で犠牲になった。などが書かれている。中央はコメ調理用ポット。右はゴムサンダルのヒール。それぞれ何処の誰が使っていたかが書かれている。↓



↑自転車輸送部隊。平均一台あたり、337kgを運搬したとある。





↑ 対砲大隊の〇〇が使っていた巨大なハンマー。重い大砲を引くため支え杭を打ち込む。
↑ 〇〇連隊の〇〇が使っていたカギ型のカマ。ディエンへの道を切り開くため、木を切り倒した。



← 決意がよく表れている手紙
第141連隊の兵士〇〇がHIM LAM HILLに出撃する直前にホー大統領と共産党中央委員会に宛てた手紙。

← 312旅団のDOC HILL 戦闘のアウトライン地図



↑ 車両 No.5126のタイヤ。〇〇が運転していた。3500km走行後壊れた。金属ナットを取り付けて輸送を続けた。1954年。



↑ 労務提供者〇〇が使っていた粉摺り機。ディエンの前線で兵士に食を供給するためである。



← デイエン作戦において312旅団で負傷兵をケアする軍事医療に使われたタライ。
← 医療部隊で使われた鉗子。
← 食糧のコンテナー
← 写真はドクター〇〇がディエン戦闘の負傷兵を診療している



←捕獲した敵の兵器など。軽機関銃、重機関銃。迫撃砲。地雷、短銃、信号弾、キャストリーのトレンチからコヒーミルまで補獲。



←兵士のヘッドギア。弾創が生々しい



←BC100 ラジオテレグラム
通信兵 CHU VAN HUI (人民軍英雄) は A 1 HILL で安定して連絡を確保した。この機器を使って戦闘隊形を守るため砲兵隊を呼び出し、何回も敵の攻撃をストップさせた。

←ショベル

316旅団の兵士が使ったもの。トレンチやバンカーを掘り、包囲攻撃を掛け、戦闘隊形を整えるためである。

←つるはし

304旅団の兵士が使ったもの。戦闘用トレンチを掘り、戦闘隊形をセットアップし、HONG CUM ソーンと HUONG THANH ソーンを分離するためだ。などとやけに詳しい説明だ。



←827歩兵中隊、394大隊、367対空砲兵隊がフランス軍の HENCAT 機を撃ち落とした37mm砲の薬莖の一つ。フランス飛行中隊指揮官将校アンドリエールは粉碎された。

←A1の丘を守備する連隊の兵の銃を洗浄するオイルのビン。



←アンサンブルチームが戦場で兵士を慰労した



←人民軍の新聞。カンボジア東北部の攻撃の記事が挿入されている。



←ヴォ・グエン・ザップ将軍、前指揮官将校・前衛党書記が一度、ディエンビエンフーの戦場を訪れた。との説明。写真はド・キャストリーの司令部跡だが、これは修復後のもの。これは時系列から言ってもウソだろう。作りものの写真だ。ベトナム戦争の伝説の将軍のディエンビエンフーにおける記録写真が無いからか・・・

ヴォー・グエン・ザップとディエンビエンフー

【ディエンビエンフーの戦闘】と【ヴォー・グエン・ザップ】

「先のベトナム近代史概略」のように第一次インドシナ戦争は長期化し1953年末になると、フランスは南部デルタ地帯を確保するにとどまり、疲弊し、厳しい情勢に置かれた。一方、ベトミン軍も広域に展開するのは兵站到難があり、難しいとみられていた（この評価は判断ミスであることがわかる）。フランスはアメリカの支援を受けて起死回生の大バクチを打つこととなる。

ベトミン軍主力を順次、おびき出し、撃退する作戦がとられた。この作戦の適地として選定されたのが、ここディエンビエンフーである。旧日本軍が設営した飛行場があり空からの補給と空挺団の降下が可能。ハノイへの航空機の往復にはここが限界。ディエンビエンフー帯は北部有数の穀倉地帯であることから南部デルタの穀倉地帯とにベトミン軍を分散させることが出来る。盆地内は火器で制圧出来る。迫撃砲では外から盆地中央部の攻撃は困難。ベトミン軍は輸送手段が貧弱で重火器を投入することは困難。兵站到難のため、大部隊を展開できない。と考えたことなどの理由からである。フランスはこの地に強固な補給・航空・防御基地を築造した。

当初、ラオス北部ルアンパバーンの山中に防御基地を設営し、ディエンビエンフーは補給・航空基地とする計画であったとされる。まさに今回の旅程の地域である。バス車窓からお見せした地勢である。

ベトミン軍にとって、こうした不利な条件をことごとく克服し、勝利に導いたのが、戦略家ヴォーグエン・ザップ将軍である。兵士たちの強い決意、断固たる意思、断固たる結束、広汎な住民の生命を賭した協力で大海戦術を展開し、フランス軍陣地、要塞の包囲網をちぢめていった。

フランス軍はベトナム人兵士、旧植民地の兵士、雇兵で構成されている状況である。戦意喪失は早い。ヴォー将軍は、ベトナム戦争終結まで、将軍・最高司令官・党政治局員の重責を務めることとなる。その後、中ソ対立、カンボジア侵攻を巡る問題などで、順次、役職を解任され、1990年には、全ての役職を解任された。高齢が理由と言うことにしておこう。失脚することとなる。ここでも権力闘争である。

インドシナ戦争からベトナム戦争終結までの、伝説の英雄、将軍として国民の信望は厚いと聞く。

現在101歳。足が不自由になりハノイの病院に入院中であるが、存命である。100歳のお祝いをする会が催されたとの報道があったと記憶する。

【博物館の展示の視点】

- ▼ 展示物は全てに、出身地方、連隊名、を添えて、使っていた兵士の実名が記されている。独立戦争犠牲者を正に評価するとともに、出身地（民族）を超えて連帯のもとに戦ったことを示そうとしている。（inter_districtの表記が印象的であった。少数民族においては、フランス軍が部族間のわだかまりを巧みに利用してフランス軍として戦うベトナム人兵士部隊を編成したこともあった。多民族（多部族）国家ベトナムは一つであることを示そうとしているのかもしれない。
- ▼ また、戦闘中の記録写真には必ず部隊名（大隊、連隊、旅団、対空砲兵隊名などである）。このことから、ゲリラ活動もあったが、明確な司令部の存在、その指揮命令に基づいて組織的に強固に編成された正規軍戦闘部隊による戦いであることを示す意図があるのかも。事実、この時代になると、ザップを中心に軍組織・兵器とも大規模に育成されていた。山中に散在するフランス軍小隊への攻撃はゲリラ戦であったと言われるが、その他の戦闘は正規軍による組織戦であった。
- ▼ 同じフランスの抑圧下にあるラオス人民や中国の軍事顧問団についての掲示もあり、国を超えた支援と連帯の中で戦われたものであることが示されている。人民軍新聞にカンボジアでの闘いの記事がとりあげられている。
- ▼ キューバ、アルゼンチン、バンドン会議など、ディエンビエンフーの勝利が世界の被抑圧者民族を勇気付け、運動を鼓舞することになった点を強調している。ここでは、まだ、国際共産主義運動が生きているのか？そんなことは無いだろう。

ヴォー将軍のことについては、1か所、軍旗を授けている写真があったのみ。肖像画もみなかった。最後に見せた作りものの写真である。ハノイの「革命博物館」では、どんな扱いになっているのかな

ベトミン軍は旧ソ連、中華人民共和国から武器・弾薬の支援を受け、供与された武器には、接收された旧日本軍の砲もあったと言われる。また、残留旧日本兵が将兵としてホーチミンやヴォー将軍に重用されたとの事実もあったようであるが、これらの記述は全くみられない。それでいいのだ。

歴史発展の主要な側面はどこにあるかである。旧日本軍からのベトミン軍への志願兵があったと思われるが、彼らの心情は？単なる生き残りのためか、ソ連軍に投降した兵士の例（ソ満国境のロマン）のように、反植民地主義、ベトナム人民との連帯、人民民主主義共和国樹立を目指すようなロマンの将兵がいたのか、関心は尽きないが・・・その結末は失望であったのか、希望であったのか・・・

参考までに当時の有名な報道写真をお見せしておきます。

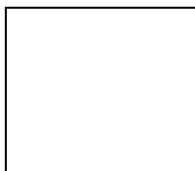
→右の写真はニクソン副大統領がニン・ビンの戦場を視察したもの(1953)左はアメリカの軍事顧問団のダニエル将軍がディエンビエンフーのフランス基地建設進捗状況を視察に訪れたもの。このころからアメリカはフランスを支援し、戦争に介入していた。ラオス山中に秘密基地を置き空爆していたのもこのころ。アメリカはインドシナ戦争に半ば公然と介入しながら、世界世論に配慮して秘匿していた。秘密の戦争であるため secret war と呼ばれる。



ニクソンは事実上の当事者であるかのごとく。

よく知られている話であるが、後年のニクソン回想録「ノーモア・ベトナム」によると、ディエン・ビエンフーでフランス軍が包囲された際、結集したバトミン軍への核兵器の使用をアイクに進言したが、却下された事実が述べられている。何と言う野蛮。これが1968年アメリカ大統領である。後年、それなりに自己総括したようであるが。・・・ベトナムからの撤退、テタント、中国との国交回復と続く。

←動画



第一次インドシナ戦争へのアメリカの公然たる介入。アイク、ニクソンの時代である。フランスの戦費の8割を供与したと言われる。爆撃機、ナパーム弾などの兵器とともに。アメリカの映像であるが正確にディエンビエンフー作戦が記録されている。フランス軍陣地(塹壕)が9箇所設けられ、それぞれ女性名が冠されていたことも。フランソワーズ、ガブリエル、ドミニクなどである。兵力の結集も。

博物館出口付近にこのような写真展示がありました。



↑地鎮祭(起工式)のセレモニー
ディエンビエンフーの歴史的勝利48周年を期してA1の丘を整備し、保全するプロジェクトが実施されました。2002年5月7日



↑ホーおじさんと記念写真を撮っておきましょう



↑外に出ればみやげ物屋。ヴォーグエン・ザップの「忘れ難き日々」英訳を購入。ユックリ読んでみましょう



←動画

さきのページで、ザップ将軍がド・キャストリー司令部跡を訪れた写真は二セものと決め付けたが、まんざらウソでは無いのかも知れない・・・この動画はフランスメディアが製作したルポルタージュ映像である。約30年前と思われる。ホーチミン大統領の死去(1969)以後、今日から約25~30年前の取材と思われる(ザップ将軍の歳格好から類推)。ザップ将軍などがインタビューに答えて当時を回想し、記録映像と取材時の現地映像をさしはさみながら編集されているプログラムになっている。(短く省略しています。)

ザップがハノイの革命博物館(?)の展示物を背にして、おだやかに話している。ベトナム軍大佐が案内してフランス軍陣地の丘やムオンタイン橋、飛行場跡地、ドキャストリー司令部やその周辺の農村風景の中に放置された兵器などが映示される。ド・キャストリーの司令部跡ではザップ将軍ではないが、nguyen van phuong 大佐が塹壕を背に、当時を回想している。

もしかしたら、この時に、ザップもド・キャストリー司令部跡を訪問しているかもしれない。ザップのこの当時の政治的な位置は知らないが、博物館を出て、市民に笑顔で取り囲まれる場面があり、ハノイ市民に慕われている様子が判る。

この映像はベトナムのテレビで放映されたものである。ザップはその後も人生の節目にテレビでインタビューを受ける姿が放映されている。ベトナム人民の深い敬愛を受け、慕われている様子が判る。彼は現在、102歳になる。ハノイで入院生活だと言われている。次にいくつか映像を紹介しします。



←動画

ザップ90歳の祝賀と言われる。身近な人たちによるうちの祝賀会のように見える。テレビのプログラムでは彼ゆかりの人物が記録映像を挟んで回想しているようだ。ベトナム語が理解出来たらな・・・



←動画

ザップ100歳の祝賀会と言われる。ここでも公的な大規模な祝賀会ではない。新たに勲章が授けられたようだ。この贈呈者が誰であるか知りたところだが、わからない。齢を重ねたザップである。

こんなものを見ながら、次は整備し、保全されているA1の丘へご案内しましょう。



【A1の丘】
フランス軍はディエンベンフー盆地内の小高い丘3箇所に強固な陣地(塹壕)を築いた。それらのうち、最後までフランス軍が立てこもった丘の一つがA1の丘である。破壊されたフランス軍の戦車が置かれ、丘のうえには記念碑が建てられ、ディエンベンフーのまちが見渡せる。少し下がるとベトナム軍の1トン爆弾のクレーターが補強して残されている。さらにベトナム軍が要塞(塹壕)攻撃用に掘り進めた塹壕が残っている。この塹壕がフランス軍陣地周辺に網の目のように張り巡らされていたと言われる。左の図面は博物館に展示されていた、A1の丘の戦略図。



↑チケット売り場を通り、フランス軍の破壊された戦車を見ながら小高い丘を登る。